



# 生活感覚のフィールドワーク

—岐阜県郡上市八幡町の事例研究から

Toward a Fieldwork for Community's Sense of Everyday Life: A Case Study of Hachiman Town, Gifu Prefecture

足立重和 ADACHI, Shigekazu (愛知教育大学准教授)

フィールドには、当初の調査者の関心をねじ曲げる“ちから”が存在する。本稿では、筆者による郡上八幡でのフィールドワークから、この“ちから”に出会うことでフィールドワークがどのように変化したのかを記述し、そのうえで「生活感覚のフィールドワーク」を粗描することにした。

キーワード フィールドワーク, リアリティ, 生活感覚



## 1 フィールドに向かう態度の変容

筆者は、これまで一貫して岐阜県郡上市八幡町の市街地区（以下、郡上八幡<sup>1</sup>）において、地元住民の語りとリアリティを対象にしたフィールドワークを行ってきた。そのフィールドワークも、もうすぐ15年が経とうとしている。といっても、15年べったりとフィールドに張りついていたわけではない。ただそれでもこの町で下宿を借り、さまざまな失敗を繰り返しながら、郡上八幡での生活から多くのことを学ばせていただいた。

今ここにある、これまでの書いてきたものをあらためて振り返ってみると、筆者自身、“大きく変わったなあ”と驚かされることがある。その変わった点とは、一言でいえばフィールドワークの方法論になるが、もっといえば“フィールドに向かう態度”といったところだろうか。フィールドワークを始めた当初、筆者は、いわゆる「構築主義<sup>2</sup>」の強い影響のもとにあった。構築主義のいう、〈今・

ここ〉での語りを通じたリアリティ構築へのこだわり、研究者が特権的に対象の“本質”を語らない相対主義などは、研究を始めたばかりの者にとってたいへん刺激的に思えた。

ところが、当初は構築主義に導かれてフィールドをふむのだが、どうしてもその路線から外れてしまい、〈今・ここ〉と〈あのとき・あそこ〉が交錯する「重層的な時空間を生きる人々」（足立、2005）を見出しながら、あえて地域生活の本質について語り、今後の生活のゆくえを示してしまう筆者が常にそこにいた。そして約15年のフィールドワークをくぐり抜けた今では、構築主義とはまったく正反対なフィールドワークの実践性について多くを語るようになっていた。この変貌ぶりは、いったい何なのだろうか。

そこには、当初の研究者の関心をねじ曲げてしまうフィールドの“ちから”が確実に存在している。その“ちから”と向き合いながら、筆者はそれまでとは異なったフィールド認識を得ることになったのだが、このことは、たんに一調査者に限られたことではなく、今

後のフィールドワークが厳しい調査状況<sup>3</sup>を乗り越えていく1つの道筋を示しているのではないだろうか。すなわち、フィールドの“ちから”を自らのフィールドワークにとりこんでいくならば、われわれ調査者は、被調査者ひいては社会一般からの信頼を得るような知的実践の道を歩むことができるのではないかと。そこで、本稿では、フィールドの“ちから”に出会うことで、郡上八幡でのフィールドワークがどのように変化したのかを記述し、そのうえで、そのような“ちから”との緊張関係のなかでどのようなフィールドワークが開かれつつあるのか、そのアウトラインを示すことにしたい。

## 2 フィールドワークの履歴

### ❖ 地域環境運動の分裂をめぐるリアリティ

冒頭に述べた、郡上八幡でのフィールドワークの始まりは、1993年に遡る。そもそもこのフィールドを選んだきっかけは、川と生活が密着するこの町で、全国的な長良川河口堰建設反対運動のネットワークのなかで有名だった反対運動が起こっていたからである。この運動はすでに、河口堰建設にともなう漁協補償金の「拒否署名活動」（1990年）や、長良川流域の市町村で唯一、有権者の過半数以上の署名を添えた「長良川河口堰建設の一時中止を求める決議を要請する請願」（1991年）といった華々しい実績を積んでいた。

ところがフィールド入りする前に、この運動は、河口堰建設を止める重要な戦略として運動のリーダーを町長選に担ぎあげて、運動全体で選挙にかかわるかどうかが意見が割れ、2つのグループに分裂してしま<sup>4</sup>った。あれほ

ど団結・成功していた運動に何が起こったのか。ここから、分裂した両方のグループの一人ひとりから「本当に何が起こったのか」「なぜ分裂したのか」を尋ねまわるフィールドワークが始まった。

だが、聞き取りにて筆者を悩ませたのは、それぞれのグループの成員が雄弁に物語る自己正当化のせめぎあいであった。まず「本当に何が起こったのか」をめぐる両者の事実報告は、自派にとって有利なように語られており、食い違っていた。またもう1つの悩みは、そのような事実報告を前提にして語られる、「なぜ分裂したのか」にかかわる運動理念のせめぎあいであった。選挙賛成派によれば、彼らの運動理念とは、意志疎通による組織化→他の人々の啓蒙→陳情・署名などの意志表示→政策決定への参加という発展的なプロセスであるという。それに対して、選挙反対派の運動理念とは、「町長選挙と河口堰問題は根本的に別」であり、町長選は町民の生活全体を左右するだけに、河口堰問題を争点にして戦っても負けてしまい、これまでの地道な活動が無駄になる、という現実路線であった。このようなせめぎあいのなかで、どちらの語りにも確かなリアリティを感じた筆者は、聞き取りの場において、選挙賛成派のもとに行けば彼らの主張に納得し、一方の反対派のもとに行けば彼らの主張に納得するという、まったくどっちつかずの状態に陥っていた。

ただそうやって聞き取りを重ねると、両派とも、今度は事実報告や運動理念とは異なる、町長選挙以前ひいては運動以前の“人づきあい”のレベルに言及するようになる。賛成派によれば、反対派の成員は、運動では「世話人」という役職にあり、町では「町衆」と呼ばれる年配の「お偉方」の意見に何でもかんでも従っており、彼らには主体性がないと批

判していた。一方の反対派も、「町衆」には必ず「お伺いをたてないと後がうるさい」と述べ、自分たちがいったん決めた運動の具体的な活動方針を「町衆」に提案し、了承を得るのが「この町のやり方」だという。ここでもまた、“人づきあい”をめぐる両者のリアリティの食い違いは泥沼の様相を呈していく。

さて、どうしよう。このようなフィールドでの経験に忠実にあろうとすると、筆者には、選挙賛成派と反対派のあいだでゆれ動いていた姿しかなかった。そうであるならば、それぞれの事実報告、運動理念、そして“人づきあい”をめぐる語りの内容についての価値判断を保留しながら、聞き取りという〈今・ここ〉において、両派がそれらを言語的資源として用いながら、いかにして「分裂」を構築していくのかという語り方を構築主義的に記述していけばいいのではないか<sup>5</sup>——そう考えたのだ。

しかし、このような対立しているグループを交互に出入りしている存在は、容易に察しがつくように、いかがわしい。このいかがわしさについては、もちろん筆者自身も気づいていて、このようなフィールドワークを深めれば深めるほど、筆者の窺い知れぬところで「ヘンな調査している」という噂が広まっているのではないかと懸念していた。

やがて、そのような懸念は現実のものとなる。上述のような聞き取りを繰り返していた1994年6月のある日、地元にて「町衆」と呼ばれ、運動では代表世話人であるA氏（当時70歳代後半、男性、自営業、故人）は、筆者の「町長選挙以前の〇〇さん（運動のリーダーの名前）とのご関係はどうだったのでしょうか？」という質問に対して、「いや、それは、なんか共通尋問のようなかたちやけれども、なぜそういった取材が必要なの？……

もう少し大きくとらえられたほうがいいんじゃないですか。なんか論文としてあまりにも小さすぎて、僕はまともにはできんと思いますよ。……いいたいことをいって順番にいったら、水掛け論になってきます」と不快感をあらわにした。もうそれ以上、「分裂」にふれることはできなかった。

ここで注目したいのは、郡上八幡のような地域社会でフィールドワークを実践する場合、調査者-被調査者のあいだで展開する事実や対象の構築過程を純粋に探求する構築主義は、かなり初期の段階では有効であるかもしれないが、フィールドワークが深まっていけばいくほど困難になっていく、という点である。どうして困難になるかといえば、そのような聞き取り自体が、両者のあいだで過去のものとして出来事化していき、次なる聞き取りのコンテキストとなっていくために、次の聞き取りにて事実の構築過程を探求した場合、そのような試みは、どことなく空々しくなってしまうからである。いみじくもA氏が「共通尋問」という表現を使ったように、〈今・ここ〉での語りによる事実構築過程を探求するための方法論的手続きである「括弧入れ」や「脱構築」が聞き取りの際に絶えず繰り返されたならば、住民にしてみれば、今までの自分たちの主張が信じられていないから繰り返されている=尋問されている、と感じるのである。

構築主義のいう事実や対象の構築過程という形式性の探求よりも、郡上八幡に住む人々にとってもっと大切な何かをとらえることが重要なのではないか——A氏は、そのようなことを筆者に問うて、うながしているのではないか。

この問いかけに応えようとしたとき、ふと筆者の頭をよぎったのは、選挙反対派の1人

がつぶやいた「民主主義っていうやつは……」という“ほやき”だった。選挙反対派の事実認識によれば、運動のリーダーが東京にて町長選挙出馬表明を行って以降、賛成派は、再三にわたり実行委員会にて「選挙戦をどのように戦うか」という議題を提起してきたという。それに対して、「どう考えればいいのか」というくらいにしか考えていなかった反対派は、「町衆」をはじめ一般の町民に意見をもとめていた。ところが、そのような“ゆったりした”態度に対して、賛成派からは「しがらみに縛られている」「自らの考えはどうか」と批判されてしまう。その後も両派は、実行委員レベルでさんざん議論したあげく、(賛成派からの提案である) たった1回の多数決の結果、1票差で「町長選を戦う」という方針がとられてしまい、その方針に反対派が抵抗をみせると、「民主的なルールに則った」賛成派から一方的に「運動を離脱する」と告げられたという。先の“ほやき”とは、必ずしも全員の納得を得るとは限らない“民主的な意志決定手続きのもつ不条理さ”を訴えていたのだ。

この“ほやき”こそ、地元住民に固有のリアリティではないのか。というのも、この“ほやき”からみえてくるものは、直接民主制とは異なる、反対派ひいては地元住民独自の意志決定のあり方だったからだ。そのあり方とは、一見すると若手の主体性を奪っているかにみえる「町衆にお伺いをたてないと後がうるさい」という決まり文句に表れていた。つまり、この町では、若手から「町衆」へ提案し、それを受けて「町衆」は若手へ再提案するというやりとりが、運動の意志決定を可能にしていた。その際、両者は、それぞれが一般の住民と顔をつきあわせることを通じて知り得た「住民の総意」にもとづいて提案・

再提案を繰り返しながら、自分たちの意志決定を“鍛えあげていた”<sup>6</sup>。そのような手続きをふむことで、彼らは、意志決定以後の生活のゆくえを皆で受け止める覚悟をもつ。それは、できるだけ「成員の意志」「住民の総意」を反映しようとする地域社会にとって合理的なシステムなのである。このような意志決定システムを、筆者は、「町衆システム」と名づけた(足立, 1999)。この成果こそ、今回の分裂への筆者なりの応答にほかならない。<sup>7</sup>

### ❖ 盆踊りの保存・継承をめぐるリアリティ

このようなフィールドワークの履歴は、その後の1997年秋から従事した「郡上おどり」<sup>8</sup>の保存・継承のフィールドワークにおいても、同じことだった。

そもそも、どうして「郡上おどり」だったのか。それは、「町衆システム」の発見から、筆者の関心が郡上八幡という町そのものへと向いていったからであり、なかでも「郡上おどり」は、地元住民のアイデンティティの中心に位置していると考えられたからである。

地元では400年踊り継がれてきたとされる「郡上おどり」であるが、じつはその踊りは、明治期には「土俗」として公的に禁止されたのち、大正期に入って日本舞踊の影響のもとに観光資源として創造されたものだった。また、この踊りは、かつて(とくに戦前)地元住民ならば誰でもが親しい者どうして歌いながら自由に踊りの輪をつくること(地元では「昔おどり」と呼んでいる)ができたのだが、しかしその後、大量の観光客を受け入れるために、戦後すぐに鳴り物を導入したうえでお囃子方と踊り方に分離され、しかも大きな1つの輪で踊るという改変がなされた。つまり、「郡上おどり」は、脈々と地元だけで伝承さ

れてきたのではなく、観光資源として外部のまなざしを意識してすでにつくりこまれていたのだ。そして、この一連の歴史に深くかかわってきたのは、約80年の歴史を有する、地元有志による「郡上おどり保存会」（以下、保存会）だった。彼らの努力のおかげで、「郡上おどり」は全国的に有名になり、今では1シーズンで約30万人もの観光客がこの町にやってくる。

しかし、「保存会」を中心にした「郡上おどり」の観光化は、意図せざる結果として「地元の踊り離れ」を引き起こしてしまうこととなる。というのも、踊りの観光化は、踊りの型を観光客向けに改変してしまうからである。それにお墨付きをあたえたのが、国重要無形民俗文化財の指定である。踊りの観光化と文化財化は、踊りの型を固定させる。そのような踊りを、地元が楽しめるはずはない。地元住民は、自分たちの伝統文化であるにもかかわらず、会場準備と後片付け以外、会場に姿を現さない。そこで立ち上がったのが「保存会」に属さない、地元有志の集まりである。1996年、彼らは、「自分たちのもとに踊りを取り戻せ」をスローガンに、戦前まで住民だけで楽しんだ「昔おどり」を復活させる踊りイベントを開催する。「昔おどり」とは、マイク、鳴り物をいっさい使わずに、松明のほのかな灯りだけで、参加者がそれぞれ交代で音頭を取りながら複数の輪で踊るものであった。

そのような状況のなか、「郡上おどり」のフィールドワークが開始された。だが、このときの筆者は、まだ構築主義の影響のもとにあり、いかにして地元住民は「これは伝統文化である」というリアリティを維持するのかわかるといって聞かせるのを忍びながら、聞き取りにおいて「今この町に踊りが2つありますよね？」

といった“とぼけた”質問を繰り返していた。この質問の裏には、大正期および戦後の踊りの“断絶”をふまえた、踊りそのものの保存・継承への懐疑から、脈々と400年受け継がれてきたと信じる住民の信念に亀裂を入れながらも、彼らがそれを〈今・ここ〉においてどのように修復していくかをみる「違背実験」が仕込まれていた。そのような筆者のしかけに対して、住民たちは、「2つとも踊りの“本質”は同じだから、踊りは1つだ」という語り方（後に「本質化」と名づける）を展開していく（足立、2000）。このファインディングスをきっかけに、筆者は、「郡上おどり」という伝統文化を事例にしつつ、伝統文化一般についての構築主義的なモノグラフを計画しはじめていた。

ところが、この構築主義的な関心に沿った計画は、結局頓挫する。なぜ頓挫したのかといえば、その計画が調査者の“一人よがり”だったからである。ここで、それに気づいた出来事を1つ紹介しよう。2001年9月、筆者は、「郡上おどり」の出張公演のため、地元住民といっしょに福井県勝山市行き的大型バスにゆられていた。その頃の筆者は、構築主義的な聞き取りをさんざん実施したあげく、「それだけでは踊りのことはわからない」という住民のことばを真摯に受け止め、1998年から毎シーズン踊っていたところだった。

そのバスに乗り込む直前、今回の公演の有志代表は、筆者に向かって、あなたはいろいろと「郡上おどり」についてしつこく調査しているが、いったい何がわかったのか、あなたの立場から今の「郡上おどり」はどう見えるのか、これから「郡上おどり」はどうあるべきなのかを、20分くらい時間をあげるからいっぺん話してくれ、と依頼してきたのだった。バスに乗り込む直前に、何の準備もな



く、しかも地元住民の前で、研究成果をしゃべるとはいったいどういうことか。バスに乗り込んでから、筆者は早速、混乱しながら何を話そうかと頭のなかを整理しはじめた。ほどなく、例の代表から筆者の紹介がなされ、バスガイドがもつマイクを手渡され、筆者は、しどろもどろになりながら、「郡上おどり」について今後どうあるべきかという自分自身の見解を即興で語っていった。

この出来事の後、筆者は、聞き取り場面にて一瞬懐疑的な態度をとって集中的に聞き取りをするフィールドワークを見直すこととなる。自らの社会学的な関心と地元住民の実践的な関心とのズレに、筆者はどのような態度をとるべきなのか？

このとき、構築主義的な関心から漏れ落ちる、ある語りが頭をもたげはじめた。それは、現在の観光化された「郡上おどり」以前の踊り場の“雰囲気”についてであった。地元住民によれば、かつての踊り場の“雰囲気”とは、そのときどきの微妙な季節の変化を感じながら、顔見知りのあいだだけで自然に音頭を取り合ったり、自然に各町内が踊りの飾り付けを競い合ったり、夜明けには自然に踊りが1つに統合されたりするなかで、浴衣をきた子どもたちがみまねで踊ったり、若い男女が連れ立って踊ったり、老人がくつろいだりするものだったという。そのような“雰囲気”を、地元住民は、現在の観光化された「郡上おどり」（への不満）と対比しながら、「昔の踊りには“風情”があったなあ」とノスタルジックに語っていく。このようなかつての踊りの“風情”を、ある人は、筆者を呼び止めて路上で語り、またある人は、仲間とともに座談会で議論する。

この“風情”という審美的なりアリティの組み上げこそ、地元住民に固有のリアリティ

の現れではないのか。これを受けて、筆者は、地元住民のいう“風情”にポイントをおきながら、「昔おどり」イベントを「家族や友人や地域の人間関係を直接活性化させよう」（足立、2007: 165）という「価値形成的な地域づくり運動」と積極的に位置づけ、観光化という生業とは異なる1つの地域づくりの方向性を論文にて示した（足立、2004a, 2004b）。

### ❖ フィールドの“ちから”をうみだす 〈人々の問い〉

以上のフィールドワークの経験からいったい何がいえるのだろうか。まず端的に言えば、それは、フィールドワークには固有の履歴が存在するということである。さらに、そのような固有の履歴のなかで、フィールドワークの当初は、調査者側からの少々の懐疑的な問いかけは許容される。なぜなら、地元住民にしてみれば、〈今・ここ〉で懐疑的な態度をとっている調査者は、1回きりの「お客様」である可能性が高いからである。筆者の場合、この時期に許される方法論が構築主義であったというわけだ。しかし、長くフィールドにかかわっていけばいくほど、調査者には、地元住民の側から“たしかにわれわれのことをよく調べているし、社会学的にはおもしろいかもしれないが、それではわれわれの課題に社会学はどう応えてくれるのか”という問いが鋭く突きつけられる。このとき、被調査者からの「切実な〈人々の問い〉」（山室、2004: 152）が調査者の身体に刻み込まれるのだ。このような地元住民がかかえる課題を、“すでに知ってしまった”われわれ調査者は、地元住民と研究者の言語ゲームが違うからといって放置することができるだろうか？

このような地元住民の課題に真摯に向き合うこと、〈人々の問い〉を社会学的な問いに

重ね合わせることで、そして微力ながら何らかの社会的な知見を析出してみることで——これらの課題を引き受けたとき、まず筆者が考えなければならないのは、あの河口堰反対運動の分裂や、あの「郡上おどり」の行く末（あるいは、「地元の踊り離れ」）に対して、いったい筆者自身はどのように決着をつけるのか、ということであった。これらの地域社会がかかえる課題に筆者なりの決着をつけるために、〈今・ここ〉で展開する住民の語りだけに固執するのは、どうにも限界があった。すなわち、〈今・ここ〉での語りだけでなく、〈今・ここ〉での語りと〈あるとき・あそこ〉に属するコンテクストとの交錯のなかで立ち現れるリアリティをとらえなければ立ち行かないのではないか（足立、2005）。もちろん、地元住民は、じつに多元的なリアリティを生きている。だが、彼らは、そのような多元的なリアリティのなかでも、「町衆システム」や“風情”といった、自分たちの身体や感覚に適合するリアリティへとにじり寄りながら、それに突き動かされて行為する。このことを見極めずに〈人々の問い〉に答えてしまうと、われわれは、まったく見当違いな方向性を示してしまう恐れがある。このとき、当初のフィールドワークにて有効とされた方法論（＝構築主義）は、調査者と被調査者との関係性の変容のなかで修正・変更を迫られる。ここに、われわれは、本稿の冒頭で述べたフィールドの“ちから”の働きをみることができるのだ。

### 3 生活感覚のフィールドワークへ

#### ❖ 生活感覚のフィールドワークの可能性

では、これまでの記述をふまえたうえで、切実な〈人々の問い〉に応えつつ、地元住民

に固有のリアリティを突きとめることで、われわれの前には、いったいどのようなフィールドワークが開かれつつあるのか。結論を先取りすると、本稿で強調してきた地元住民に固有のリアリティは、郡上八幡に住む人々の「生活感覚」に行き着くと筆者は考えている。ここでいう「生活感覚」とは、〈今・ここ〉での人々の作為やコンテクストを越えていく「地元住民のあいだでの、繰り返しの生活のなかから出現する、価値づけられた感受性」（足立、2004a: 92-3）と定義したものである。このような生活感覚は、前節の2つの事例において、おぼろげながら浮かびあがっている。

まず1つめの事例である、意志決定の手続きとしての「町衆システム」のリアリティは、郡上八幡における人と人とのあいだの平等や公論形成の感覚にかかわっている。事例に立ち返るならば、選挙賛成派からすれば、世話人のような「町衆」の存在は、直接民主制を通すべき環境運動のあり方にとって許されるものではなかった。しかし、選挙反対派については地元住民が皆でなにがしかの意志決定を遂行する際に「町衆システム」という手続きに依拠するのは、「これがこの町にとって正しいやり方だ」と同時に「これがみんなの総意である」という郡上八幡の人々の生活感覚がそこに現れているからにほかならない。

また、2つめの、現在の「郡上おどり」をめぐって、かつての踊りの“風情”を語り合うなかで組み上げられるリアリティは、1980年代後半以降の、外部からもたらされた観光化や文化財化といった地域づくりの生業的な価値のおき方とは一線を画しながら、地元住民の生活感覚のうちの“美的側面”をうつしだしたものといえよう。

これらの事例からわかるように、筆者の議論の延長線上には、多様で微細な地元住民に

固有のリアリティについての記述・分析を積み重ねていくことで、やがて郡上八幡に住む人々の生活全般にわたる生活感覚の総体をえがきだすことができるはずだという構想が背後にひかえている<sup>10</sup>。もちろん、地元住民の生活感覚の総体をえがきだすためには、本稿で紹介した2つの事例だけでは不十分だ。そういった意味では不完全なのだけれども、ここでは、以上のような生活感覚の総体をえがきだすモノグラフを志向するフィールドワークを「生活感覚のフィールドワーク」と呼んでおきたい。

ただ、そのようなフィールドワークでえがかれる郡上八幡に住む人々の生活感覚は、われわれにとっていったいどのような意味があるというのだろうか。この問いかけは、モノグラフ研究の意義そのものにかかわっている。宮内泰介は、これまでの事例研究の意義として「対象全体の1つのサンプル」や「対象の本質の探究」があげられてきたのだが、その位置づけの両方が事例研究者のリアリティからどことなく乖離していると指摘する。そのうえで、彼は、ソロモン諸島マライタ島の住民が営むバラエティ溢れる生活戦略の記述から、“生活を組み立てるリソース”として事例研究があるのだと議論している（宮内、2005：35）。

この宮内の議論を引き受けるならば、意志決定の手續きとしての「町衆システム」のリアリティや盆踊りの継承をささえる“風情”という審美的リアリティから浮かびあがる生活感覚は、明らかに、目先の状況にふりまわされないロングタームにおよぶ、しかも皆で生活することを楽しむ“共同性のなかにひそむ自由”とこういうような「価値」の導き出しを可能にさせるように思う。このような価値は、今日のグローバル化によって強いられ

た〈個人〉どうしの競争原理に巻き込まれつつあるわれわれにとって、オールタナティブで、新しい共同性を志向するライフスタイルへと仕切り直すことを可能にさせるのではないだろうか。つまり、郡上八幡に住む人々の生活感覚をふまえることは、先に述べた〈人人の問い〉への応答にとって必要不可欠であると同時に、われわれがよりよく生きるための価値形成のヒントになるのである。ここに、地域社会における生活感覚のフィールドワークの可能性が見出されよう。

### ❁ 契約と信頼

以上、郡上八幡という個別特性に傾いた議論ではあったが、本稿では、厳しい調査状況を越えるための知的実践としての「生活感覚のフィールドワーク」を粗描してきた。

このようなフィールドワークは、厳しい調査状況を意識したものなのだが、近年盛んに論じられるようになった調査倫理<sup>11</sup>とは異なった構えをみせている。調査倫理の構え方とは、一言でいえば、“契約の論理”にもとづいている。この契約の論理とは、調査者が被調査者に“調査していいか”“データを公表していいか”といったことを両者の約束としてあらためて定式化（さらには、文書化）することで厳しい調査状況に 대응しようとするものである。周知のとおり、日本社会学会においても、この契約の論理に沿って、「倫理綱領」や「倫理綱領にもとづく研究指針」にて具体的な調査倫理が示されるようになった。だがその一方で、ライフストーリー研究者からは、調査倫理の重要性を認めながらも、具体的な場面での倫理遵守の困難さやその硬直性が指摘されている。たとえば、蘭由岐子は、聞き取りでの倫理的配慮が「調査者のリスク回避のため」（蘭、2007：129）になることを



指摘し、また、桜井厚も、どのような調査状況にも拘り定規に当てはめられるべきものでないとして、倫理的手続きの「状況的相対主義」(桜井, 2007: 108)を提起している。

たしかに時代の趨勢として、今後のフィールドワークには、調査倫理をめぐる議論が当然必要となってくるだろう。もちろん、筆者自身も、調査倫理をふまえながらも、その問題点やあるべき姿をしっかりと見極めていきたいと考えている。ただ、このような一連の議論でちょっとしたひっかかりを覚えるのは、われわれ調査者が契約の論理でもって厳しい調査状況を論じれば論じるほど、どうしても“どういった倫理的手続きをとるべきか”とといった細々とした手続き論にのみ議論が方向づけられてしまい、その一方で、知のレベルからのフィールドワークそれ自体のとらえ返しにまでなかなか議論が及んでいかない、という点である。

はたして、厳しい調査状況に因應するために、われわれは、契約の論理にもとづいた構えをとるしかないのだろうか。むしろ、そのような調査状況を契機として、知のレベルからフィールドワークが変わっていく可能性はないのだろうか。

その一方で、本稿でこれまで述べてきた生活感覚のフィールドワークは、調査倫理論のいう契約の論理とは異なった、知のレベルからの「信頼の論理」にもとづいた構え方をみせている。すなわち、調査者自らの関心をねじ曲げるフィールドの“ちから”に身をおきながら、被調査者(本稿では、郡上八幡に住む人々)の生活感覚をふまえつつ、彼らの切実な〈人々の問い〉に因應するような社会学的フィールドワークを行っていくこと——これによって得られたファインディングスとその意味に、被調査者ひいては社会一般から“信

頼”してもらえるようになることで、われわれは、厳しい調査状況を乗り越えることができるのではないだろうか。そのような乗り越え方は、(いざ実際の調査場面では調査倫理をふまえながらも、)調査倫理に表れた契約の論理をふきとばす、「対象との異質性を維持し自他区分をそのままにして、対象への没入と沈潜が可能であり、それによって自他の境界は飛び越えられる」(松田, 2003: 510)ことに賭けるフィールドワークの構えを示しているように思われるのだ。

はたして、このようなフィールドワークは、あまりに楽観的すぎるだろうか。

[追記] 本稿は、関西学院大学大学院社会学研究科に提出した博士学位請求論文「地域社会における語りとリアリティの社会学的研究——岐阜県郡上市八幡町のモノグラフ」(2005年)の終章をもとに、大幅な加筆・修正を加えたものであり、平成18~19年度文部科学省科学研究費補助金若手研究B(課題番号:18730322)助成による成果の一部でもある。

#### 注

- 1 岐阜県郡上市八幡町は、岐阜県のほぼ中央にあり、木曾三川の1つ長良川の河口から約100キロ上流に位置する、人口約1万6000人の町である。その八幡町のなかでも“郡上八幡”と呼ばれる中心市街地区は、約1万人の人口を有している。今でいう郡上八幡は、1889(明治22)年に八幡11箇町と呼ばれた町場と鳥谷村が町村合併して誕生した町である。その後、この町は、1954(昭和29)年と2004(平成16)年の2度の町村合併で、現在は郡上市(人口約4万9000人)の一部に組み込まれている。
- 2 ここでいう構築主義とは、大きくは、(社会問題、科学、ジェンダーなどの)対象や事実が本当に実在するかどうかはいったん「括弧入れ」したうえで、いかにして対象や事実が人々の言説を通じて〈今・ここ〉において認知的に構築されているかという過程を記述する方法論をさしている。
- 3 近年、わが国の社会学研究者のあいだで、社会調査の実施が困難になってきたという認識が広く共有されるようになってきた。周知のとおり、さまざまな「調査」と称する活動が社会に溢れかえるなかで、調べられる人々は、調べられたことがその後どのように扱われるのか、という点に自覚的になってきた。2005年の「個人情報保護法」の施行や、そ

れにひきつづいたこの法制度への官公庁や一般市民の過剰反応などは、その現れであろう。また、それと同時に並行して起こった、「科学」や「学術研究」に対する欺瞞性の露呈や権威失墜も、社会調査の困難に大きな影を落としている（桜井，2003：460；玉野，2003：545-6；高坂，2007：4-5）。このような厳しい調査状況に対し、社会学における社会調査論の領域では、調査倫理の議論が活発になってきた。調査倫理をめぐる議論については、本稿の最後にふれることにしたい。

- ・4 後述するように、2つのグループとは、選挙賛成派と選挙反対派のことである。両派とも、若手（当時30歳代後半）の実行委員と呼ばれる成員が中心である。どちらかといえば、賛成派は八幡町市街地以外の出身者が多いのに対し、反対派は市街地区出身者が多い。職業的には、どちらとも目立った傾向はなく、さまざまであった。なお、この事例の紹介にあたっては、足立（1995，1999）の記述と一部重複している。
- ・5 その具体的な記述については、足立（1995）を参照していただきたい。ここでは、調査者である筆者が（あくまでも不確定ではあるが）運動の分裂の事実や原因をうっすらと知りながらも、「分裂について『本当に何が起こったのか』や『分裂の原因は何か』を当面は問わないこと」（足立，1995：76）、すなわち「括弧入れ」して、両者の語り方に関心を示すという構築主義のフォーマットに沿った記述になっている。
- ・6 そして、「町衆」と若手実行委員とのやりとりの密度は、意志決定以後の成員にふりかかる生活へのインパクトの度合いによって決まっていた。たとえば、先に紹介したような署名活動や議会への請願などは、町長選挙に比べて、意志決定以後の生活へのインパクトが小さいため、「町衆」と実行委員とのやりとりの密度はうすいものとなっていた。この点についての詳細は、足立（1999：160）を参照していただきたい。
- ・7 ただし、このような筆者による応答（＝「町衆システム」の析出）は、選挙賛成派にとってみれば、異論がないわけではない。じつは、「町衆システム」を指摘した論文（足立，1999）を当事者に送った後、選挙賛成派であるB氏（当時40歳代前半、女性、地元出身の著名な詩人）から1通の手紙が届いた。その内容は、かかる論文へのコメントであった。ここで、ご本人の許可を得て、その内容の一部を引用することにしたい。

早速拝読。……いままでわからなかったことが「町衆システム」という言葉でとても明解にのべられています。なかなかいいシステムだなあ、というか。こういう風に機能していたのかと実感さ

せられました。……ところで、気になったことがあります。……2派の対立が顕在化した時、「反町衆派」（＝選挙賛成派）がどのように対話をこころみてもガンとして受けつけず、そういうあり方こそが閉鎖したとでも「ムラの」な対応の仕方でした。民主的ではありませんでした。しかしながらこういう事には言及できないでしょうね。文学の領域になってしまいますから。……運動が巨大化し、あるいは慢性化したとき必ず分裂がおきます。その理由というのは決して大層なものではなく、はたまた文字にすらできないような“さまざま”な感情のすれ違いと、同じくさまざまな利害関係で分裂してゆきます。……文学の役割、可能性をいま新たに教えられたような気がします。（2000.8.10付けの手紙、カッコ内補足筆者）

この手紙からうかがえることは、当事者としてのB氏が「いままでわからなかったこと」（あるいは、見えなかったこと）が明解になった点がある程度評価しながらも、選挙賛成派に属した自らの経験や自派の運動理念の観点から「町衆システム」の存在や合理性について完全に納得しているわけではない、という点である。とくに、彼女が、今回の分裂の原因を（たんなる）“さまざま”な感情のすれ違い」ととらえ、そのような世界を記述できる文学の可能性に言及しながら、「社会学というディシプリン」の限界を指摘している部分は、社会学的な調査者に向けて「フィールドの現実とは何か」を常に考えさせる力強さを秘めているように思う。われわれ調査者は、“現場”ということばを強調しながらも、しよせん「ロゴスの世界に生きてゆくしかない」（鶴飼，1991：108）のか、と。しかし、現代日本の地域社会で起こる環境問題を念頭においた場合、長良川河口堰反対運動のような、全国にネットワークを張りめぐらせる新しい環境運動は、今後ますます地域社会と接点をもちながら、自らの活動を展開していかなければならないだろう。そういったときに、「町衆システム」のような地元住民のリアリティをふまえずして、住民と市民が協働する環境運動の展開などありえない、と筆者は考えている。

- ・8 「郡上おどり」とは、八幡町市街地区の各自治会が主催となって、各町内を回りもちで催される盆踊りのことである。この盆踊りは、「かわさき」をはじめとする10種目の踊り種目からなっており、「郡上おどり」というのは、それらの総称である。また、“回りもちで催す”というのは、各自治会が自分たちの身近なお寺、神社、お地蔵さんの縁日に因んで踊りを奉納するため、盆踊りの開催期間が毎年7月中旬から9月上旬までの約30日間にもわたるからである（すべて夜間に開催されるが、そのうちの8月13～16日までは徹夜で踊る）。この盆踊り

の詳しい概略については、足立(2000: 135-8, 2004a: 86-7)を参照のこと。なお、「郡上おどり」の事例紹介にあたっては、足立(2000, 2004a, 2004b, 2007)の一部と重複している。

- ・9 ここで、“一人よがり”と表現せざるをえなかった出来事をもう1つ紹介しておきたい。それは、先にふれた「本質化」をファインディングスにした論文(足立, 2000)を地元へ送付した後に起こった。この論文への地元の反応は、管見によれば、おおむね良好のようだった。ところが1通だけ、「木を見て森を見る”の難しさを感じ入りました。失礼ながら……」(2001.12.12付け)というハガキが筆者のもとに届く。そのハガキの送り主は、以前聞き取りにも協力していただいたC氏(当時60歳代後半、地元の郷土文芸誌の主宰者、故人)からだった。その後、筆者は、地元の図書館にて偶然C氏に出会い、そのハガキへのお礼を述べた。すると、彼は、そのハガキの内容について「あなたには不快かもしれんやろ……他のところではお褒めのことばばかりやろ……細々したことをやってるけど、大事なところは押えられてへん……たしかに理論構築力はさすがやと思うけど、自分で遊んでいる分には楽しいが……」(2002.2.15)と口火を切ったのだ。この語りをつむきながら聞いていた筆者は、彼の「理論構築力」ということばに強く反論したい衝動に駆られた。このとき、内心では、「いや、これこそ、あなたがたの現実なのだ!」という思いと「社会学とはそういうものだ!」という思いとが渦巻いていて、それらを抑えるのに必死だったのを覚えている。しかし今から思えば、C氏も、あのパスのなかでの一件と同様、相対主義的かつ懐疑主義的な研究成果ではなく、“自分たちの踊りに対してあなたはどのように考えているのか”という答えをもとめていたのかもしれない。

- ・10 この発想については、人類学者である菅原和孝が提示した「ブッシュマン・センス」(菅原2004)ということばからヒントを得た。

- ・11 調査倫理論については、桜井(2002: 82-9)をはじめ、『社会学評論』53巻4号の特集「社会調査の困難」や関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラムによる『先端社会研究』6号の特集「調査倫理」の各論考を参考にした。

#### 文献

- 足立重和, 1995, 「長良川河口堰建設反対運動における『分裂』の構成——岐阜県X町の事例から」『関西学院大学社会学部紀要』73: 75-86。
- , 1999, 「地域環境運動の意志決定と住民の総意——岐阜県X町の長良川河口堰建設反対派の事例から」『環境社会学研究』5: 152-65。
- , 2000, 「伝統文化の説明——郡上おどりの

保存をめぐる」片桐新自編『シリーズ環境社会学3 歴史的環境の社会学』新曜社, 132-54。

- , 2004a, 「地域づくりに働く盆踊りのリアリティ——岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」『フォーラム現代社会学』3: 83-95。

- , 2004b, 「ノスタルジーを通じた伝統文化の継承——岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」『環境社会学研究』10: 42-58。

- , 2005, 「地域社会における語りとりアリティ——郡上八幡という場所をとらえるための試論」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『先端社会研究』3, 関西学院大学出版会, 9-33。

- , 2007, 「盆踊り——その“にぎわい”をどのように考えることができるのか」小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学 入門——テーマと出会う, 問いを深める』ミネルヴァ書房, 153-71。

- 蘭由岐子, 2007, 「『問いかけに気づき, 応えること』をめざして——病者・被害者・事件当事者に関する聞き取り調査から」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『先端社会研究』6, 関西学院大学出版会, 115-41。

- 高坂健次, 2007, 「『調査倫理』問題の現状と課題——特集のことばに代えて」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『先端社会研究』6, 関西学院大学出版会, 1-22。

- 松田素二, 2003, 「フィールド調査法の窮状を超えて」『社会学評論』53(4): 499-515。

- 宮内泰介, 2005, 「事例研究再考——生活を組み立てる〈力〉としての調査研究」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『先端社会研究』2, 関西学院大学出版会, 27-46。

- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

- , 2003, 「社会調査の困難——問題の所在をめぐる」『社会学評論』53(4): 452-70。

- , 2007, 「ライフストーリー研究における倫理的ディレンマ」関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム『先端社会研究』6, 関西学院大学出版会, 87-113。

- 菅原和孝, 2004, 『ブッシュマンとして生きる——原野で考えることばと身体』中央公論新社。

- 玉野和志, 2003, 「サーベイ調査の困難と社会学の課題」『社会学評論』53(4): 537-51。

- 鶴飼正樹, 1991, 「これは『社会調査』ではない——参与観察をめぐる五通の手紙」仲村祥一編『現代的自己の社会学』世界思想社, 94-108。

- 山室敦嗣, 2004, 「フィールドワークが〈実践的〉であるために——原子力発電所候補地の現場から」好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社, 132-66。

# 少年院在院者の発達的問題性と 自尊感情・攻撃性との関連

Consider Issues Associated with Developmental Difficulties, Self-esteem and Aggressions in a Correctional Facility

松浦直己 MATSUURA, Naomi (東京福祉大学大学院教授)

宇治田直樹 UJITA, Naoki (青森少年院統括専門官)

十一元三 TOICHI, Motomi (京都大学大学院医学研究科教授)

少年院在院者を対象に、Rosenberg 版自尊感情尺度を実施したところ、入・仮退院時で有意な変容は認められなかった。同様に日本版 Buss - Perry 攻撃性質問紙を入・仮退院時に実施したところ、仮退院時において、有意な攻撃性の上昇が確認された。発達的問題性と自尊感情・攻撃性には、密接な関連があることや、入院時の自尊感情と攻撃性に負の相関関係があることが明らかにされた。

キーワード 少年院, 発達的問題性, 自尊感情



## 1 問題の背景と研究の目的

青少年問題は社会的な課題となっているが、中でも少年非行に対する関心は高い。社会に大きな影響を与えるような事件が起こると、極端な原因論追及や因果関係についての推測が展開されるが、実証的な資料に基づいた分析は稀少である。加害者が「普通の子」であったとか「いきなり型」であったことが過大に解釈されることがあるが、現時点では粗暴的非行事例の特徴をこれらの概念を用いて説明することは適当ではない(岡邊・小林, 2005)との報告がある。非行化した少年の特性についての多面的調査を実施し、得られた資料から実証科学的事実を導き出すことが重要といえよう。

縦断的追跡調査を基盤とする発達疫学研究の発展により、非行を含む行動の問題の危険因子が明らかになってきた。Moffitt (1990) は New Zealand の Dunedin で大規模発達疫学調査を実施した。1000 人以上の母集団か

ら 435 人を無作為に抽出し、3 歳児時点で注意欠陥障害 (Attention Deficit Disorder : ADD) を診断された群とそれ以外の群を 15 歳まで追跡した。その結果、ADD と診断された約半数が非行化したこと、幼少時期の攻撃性の高さは青年期の行動の問題と密接に関連していることを明らかにした。Biederman ら (2001) も注意欠陥/多動性障害 (Attention Deficit Hyperactive Disorder : AD/HD) 児を追跡した結果、不注意や多動性が見られる幼児は、逸脱行動や非行といった外在化する問題のみならず、内在化する問題(うつ, 不安障害等)でも予後が悪いことを指摘した。また、不注意や多動・衝動性の徴候が顕著な子どもほど、後になって反社会的行動を表出させやすいことも実証的に示した。このように、AD/HD の行動特性と非行を含む反社会的行動との親和性を示す研究は豊富に存在する (Biederman et al., 1993 ; Fergusson et al., 1997 ; Connor et al., 2003 ; Lee and Hinshaw, 2004)。

残念ながら日本でこのような大規模な縦断



的疫学研究は実現していないが、松浦らは全国で複数の少年院での調査を実施しており、欧米の先行研究と符合する結果を集積しつつある（松浦ほか，2005；松浦・橋本，2007）。少年院在院者の中に、AD/HDの他に学習障害（Learning Disorder：LD）や広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorder）等の発達の問題を有する少年が存在する可能性が示唆されつつあり、臨床的にも注目される（松浦，2006；松浦ほか，2007b，2007c）。

同様に、非行と自尊感情、攻撃性との関連にも多くの研究者が注目してきた。低い自尊感情が非行や反社会的行動などの外在化する問題を表出させやすい（Rosenberg et al.，1989；Fergusson and Horwood，2002）と主張する研究者は多く、臨床的にも合致するといえよう。一方で、低自尊感情と外在化する問題との直接的関連は見られない、という逆の指摘も存在する（Bushman and Baumeister，1998；Kirkpatrick et al.，2002）。

低自尊感情と外在的問題行動が関連するとの仮説に立った研究は、大きく3つに分類できる（Donnellan et al.，2005）。Rosenbergは低い自尊感情が社会との紐帯を弱体化させ、その結果として社会的不適応や非行行動の増大につながるとした。Hirschi（1969）はSocial Bonds Theoryで同様の指摘をした。人間中心主義的心理学者として知られるRogersは問題行動表出メカニズムを、“肯定的自己感をもてないことにより、心理的な問題を抱え、攻撃行動が惹起されやすくなる”（Rogers，1961）と説明した。ネオフロイト派とされるHorneyは幼少時期のコンプレックスや屈辱感（低い自尊感情も含む）が攻撃性を高め、反社会的行動を動機づける（Horney，1950）と説明した。

しかし、このような低自尊感情仮説は一貫

した結論を得ておらず、実証されているとはいえない（Donnellan et al.，2005）。Baumeisterら（2005）は、非行者の自尊感情が低いという証拠はどこにもないと指摘し、暴力や犯罪との関連が強いのは低い自尊感情ではなく、むしろ非現実的な高い自尊感情であり、歪んだ自己愛性が問題であることを実証的に示した。“低い自尊感情が暴力を引き起こす”という固定的観念を振り払うことにより、より有用な研究が展開できると示唆した。このように、低い自尊感情が将来の外在的問題行動につながるという低自尊感情仮説は、一方では支持されつつも、実証科学的な裏づけに欠けるという指摘も多い（Donnellan et al.，2005）。

松浦らは複数の少年院で在院者の自尊感情や攻撃性に関する調査研究を行ってきた。その結果、年齢と性別をマッチングさせたコントロール群と比較して、深刻なほど少年院在院者の自尊感情が低いことが明らかにされた（松浦ほか，2005）。また、予想に反して少年院在院者の攻撃性が低く、仮退院時には有意に攻撃性が高まることも示された（松浦ほか，2006）。この結果に対して合理的かつ一定した解釈は成立していない。同時に関連研究の対象者には本研究でも使用している複数の発達特性スクリーニングテストを実施している。発達スクリーニングテスト調査結果から、施設を問わず少年院在院者には共通する発達の困難性が存在することが示唆されている（松浦，2006）。

広義の発達障害に関する研究は領域横断的に行われるようになってきており、「キレル」行動や発達および行動の問題の研究には、とくに注目が集まっている。これらは児童精神医学の発展や非侵襲的脳画像技術の進歩に拠るものが大きいであろう。その影響は学校教



育や矯正教育にも及んでいる。すなわち教育の効果を科学的に評価し、より実証的に効果的であると示された方法を重用しようという流れが加速している。本研究は、前述のような動向を踏まえたうえで、非行化した少年の特性や矯正教育を受けた後の変化について、より実証的に検証を試みようとするものである。定量化された資料を丁寧に集積し解析することにより、矯正教育の改善にも寄与する可能性があると同時に、得られた知見が一般社会の正確な非行理解を進めることも期待できる。時宜を得た社会的意義のある研究といえよう。

関連領域の先行研究が明らかにしたことを踏まえ、本研究では以下の3点を明らかにすることを目的とする。①矯正教育を受けて自尊感情や攻撃性の変化は見られるのか、②少年院在院者の自尊感情と攻撃性に関連はあるのか、③発達特性は自尊感情や攻撃性に影響を与えているのか、である。

## 2 対象と方法

### 🔍 調査対象群

2005年7月～2007年6月の期間内に、A少年院に入院し一定期間の矯正教育を修了して仮出院した118名の内、全ての資料に不備のない114名を調査対象群とした。全て男性で入院時の平均年齢は17.4歳（14～19歳）であった。

### 📄 質問紙

1. 自尊感情尺度（Rosenberg版） Rosenberg（1965）により作成された、自尊感情尺度の10項目を、山本らが邦訳したものをを用いた（山本ほか、1982）。Rosenbergは他者と

の比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている（井上、1992）。また自身を「非常によい（very good）」と感ずることではなく、「これでよい（good enough）」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すと考えている。自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味している（遠藤、1992）。このような背景から、本論では「自尊感情」（self-esteem）で統一して使用する。あてはまる（5点）、ややあてはまる（4点）、どちらともいえない（3点）、ややあてはまらない（2点）、あてはまらない（1点）の5件法で回答を求めた。入院時と仮出院時に同様のものを実施した。

なお、邦訳版でも信頼性や妥当性が検討されているが（山本ほか、1982）、オリジナルと邦訳版との等価性については十分な議論が展開されているとはいえない。日米では社会的基盤や文化の差は大きく、“self-esteem=自尊感情”が成立するかどうか（等価性）は微妙な問題である。すなわち結果の解釈には留意が必要である。

2. 日本版 Buss-Perry 攻撃性尺度 Buss and Perry（1992）の質問紙を日本版に標準化した日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（Buss-Perry Aggression Questionnaire：BAQ）（安藤ほか、1999）を用いた。この質問紙は言語的攻撃（verbal aggression）、身体的攻撃（physical aggression）、敵意（hostility）、短気（anger）の4尺度において得点化される尺度構成をもっている。攻撃性の概念の細分化については統一した見解がないのが現状であるが（山崎、2002）、この質問紙により少年院在院者の全体的な攻撃性が測定されると考えられた。

Bussら（1992）は“ The Aggression Questionnaire”の高い内的整合性と信頼性を確認している。本質問紙は安藤らによって内的整合性と安定性を備えた尺度に作成され、ある程度の妥当性も確かめられている（安藤ほか，1999）。非常に良くあてはまる（5点）、だいたいあてはまる（4点）、どちらともいえない（3点）、あまりあてはまらない（2点）、まったくあてはまらない（1点）の5件法で回答を求めた。入院時と仮退院時に同様のものを実施した。

本質問紙でも、自尊感情における同様の問題点、すなわち等価性についての問題がある。本質問紙が捉えようとする特性（aggression：攻撃性）は、文化によってある程度の相違が存在すると考えるのが妥当であろう。

**3. 新田中B式知能検査（非言語性集団式知能検査）** 田中寛一らによって標準化された非言語性中心の集団式知能検査である。少年鑑別所では鑑別の基礎資料として、入所者全員に本検査を実施している。簡便に実施することが可能であり、非言語的能力を測定する指標としては優れていることが指摘されている。

**4. AD/HD-YSR（自己記入式AD/HDスクリーニングテスト）** いくつかの少年院では、少年の発達特性をアセスメントするために自己記入式AD/HDスクリーニングテストを実施している。これはDSM-IVをもとに、小栗が矯正施設用に作成したものである（小栗，1999）。不注意に関する9項目、多動・衝動性に関する9項目、計18の質問項目より構成されている。回答者に対し、「小学校3～4年生ころまでの自分のことを思い出しながら」記入することを求めている。質問に対して、(1)なかった、(2)ときどきあった、(3)よくあった、(4)わからない、で回答し、回

答の(1)(4)は0点、(2)(3)は1点として集計した。DSM-IVの基準に従い、「不注意関連」で計9点、「多動・衝動性関連」で9点とし、合計得点は0～18点の値をとる。松浦らの研究により信頼性と内的一貫性が確かめられ、標準化作業が進められている（松浦ほか，2008 in press）。また、男子のcutoff pointは14点であることが示されている。本研究対象群114名のうち、14点以上のAD/HD疑いあり群は28名（24.6%）であった。

### ❁ インフォームド・コンセント

対象群における調査では、少年の発達特性を捉えたうえで、効果的な矯正教育を実施していくことや、テストで得られた結果は統計的に処理して研究に使用することについて、保護者会で十分に説明を行っている。

### ❁ 解析の手順と統計学的検定

解析にあたっては、入院時・仮退院時の自尊感情・攻撃性の変容を捉えるために対応のあるt検定を行った。相関分析により変数間の相関係数を表し、発達的問題性（質問紙の回答から検出された傾向）と自尊感情・攻撃性の関係性を見た。さらに自尊感情・攻撃性の得点の高さと発達的問題性との関連を分析するため、自尊感情尺度得点と攻撃性得点を高得点群・中得点群・低得点群の3群に分類した。3群に分類する基準としてcutoff pointを $M \pm 1.5SD$ とした。このようなcutoff pointの設定は諸領域で使用されている（Glass et al., 1987；Sakata and Nishida, 1996；Squires et al., 1997；Kristen and Elena, 2005）。次に、導かれたcutoff pointを適用したうえで、群間比較を行った。有意水準は5%未満とした。統計分析はSPSS 13.0J for Windowsを使用した。

### 3 結果

#### ❖ 入・仮退院時の自尊感情・攻撃性の変容

Rosenberg 版自尊感情尺度を使用して、対象群に実施したところ、入・仮退院時で自尊感情の有意な変容は認められなかった [t (113) = 1.28, p = .204] (表1)。すなわち矯正教育期間において、自尊感情の変化は認められなかった。同様に日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙を入・仮退院時に実施したところ、仮退院時において、有意な攻撃性の上昇が確認された [t (113) = 2.74, p = .007] (表2)。

#### ❖ 記述統計量および相関係数

各因子の記述統計量、変数間の相関係数を

表1 自尊感情尺度における入・仮退院時の変化

	度数	平均値	標準偏差	t 値	df	P value
入院時	114	30.1	6.0	1.28	113	.204
仮退院時	114	30.9	6.9			

n. s

表2 攻撃性質問紙における入・仮退院時の変化

	度数	平均値	標準偏差	t 値	df	P value
入院時	114	78.2	13.1	2.74	113	.007
仮退院時	114	81.9	15.2			

表3 各因子の記述統計量および変数間の相関係数

	平均値	標準偏差	度数	相関係数									
				1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.		
1. 不注意得点	6.2	2.5	114	—									
2. 多動・衝動性得点	4.2	2.4	114	0.46***	—								
3. AD/HD 合計得点	10.4	4.1	114	0.86***	0.85***	—							
4. 田中B式IQ	4.1	13.4	114	-0.13	0.07	-0.03	—						
5. 入院時自尊感情	30.1	6.0	114	-0.24**	0.04	-0.12	0.03	—					
6. 入院時攻撃性	78.2	13.1	114	0.45***	0.39***	0.49***	-0.07	-0.20*	—				
7. 仮退院時自尊感情	30.9	6.9	114	-0.10	-0.01	-0.06	0.20*	0.47***	-0.15	—			
8. 仮退院時攻撃性	81.9	15.2	114	0.14	0.27***	0.24**	-0.01	-0.02	0.50***	-0.08	—		

注1) \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001。

表3に示す。AD/HD-YSR と自尊感情、攻撃性に2つの特徴的な関係性が検出された。1つは、入院時の自尊感情とAD/HD-YSRの不注意得点に負の相関関係が見られたが、仮退院時の自尊感情とAD/HD-YSR得点には相関関係が見られなかった。2つめに、入院時の攻撃性とAD/HD-YSRの不注意、多動・衝動性、合計得点すべてに正の相関関係が認められたが、仮退院時の攻撃性と正の相関関係にあったのは多動・衝動性、合計得点であった。入・仮退院時ともに、少年の発達的問題性と攻撃性は密接な関係にあった。

さらに、入・仮退院時の自尊感情・攻撃性の関係性についても2つの特性が検出された。1つは、入院時の自尊感情と攻撃性は負の相関関係にあったが、仮退院時の自尊感情と攻撃性にはそのような関係はなかったことである。入院時には自尊感情が低いほど攻撃性が高い傾向にあるが、仮退院時にはそのような関係性は見られなくなった。もう1つは、入・仮退院時の自尊感情、および入・仮退院時の攻撃性はそれぞれ強力な相互相関関係にあった、ということである。

#### ❖ AD/HD-YSR 得点が自尊感情に与える影響 (表4)

次に、AD/HD-YSR 得点と自尊感情との

表4 自尊感情尺度における因子別に見た各群の平均値および分散分析の結果

不注意得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	4.3	2.6	94	6.2	2.4	10	7.2	1.6	4.00* A1<A2, A1<A3
多動・衝動性得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	2.7	2.8	94	4.5	2.2	10	3.4	2.7	3.23 n.s
AD/HD-YSR 合計得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	7.0	5.0	94	10.7	4.0	10	10.6	3.4	3.81* A1<A2

注1) A1=高自尊感情群, A2=中自尊感情群, A3=低自尊感情群。

注2) 有意な差が見られたもののみ記した。

注3) \* $p < .05$ 。

関係を解析した。まず入院時の自尊感情尺度得点の高さをもとに対象群を分類した。M + 1.5SD 以上の高自尊感情群 (A1; n=10), M - 1.5SD 以下の低自尊感情群 (A3; n=10), その中間の中自尊感情群 (A2; n=94) とした。AD/HD-YSR 得点と自尊感情との関係を明らかにするために, 不注意得点, 多動・衝動性得点, 合計得点それぞれにおいて, 一元配置の分散分析を行った。その結果, 不注意得点が自尊感情に与える影響は有意であった [F (2, 111) = 4.00,  $p < .05$ ]。Tukey の HSD 法を用いた多重比較を実施したところ, A1 と A3 群間, A2 と A3 群間に有意差があり, 不注意得点の高さが低自尊感情に与える影響が示唆された。一方, 多動・衝動性得点が自尊感情に与える影響は有意ではなかった。

さらに, AD/HD-YSR 合計得点が自尊感情に与える影響も有意であった [F (2, 111) = 3.81,  $p < .05$ ]。多重比較によれば, A1 と A2 群間に有意差があり, 高自尊感情群は他の群と比較して AD/HD-YSR 合計得点が低いという関係性が示唆された。

#### AD/HD-YSR 得点が攻撃性に与える影響 (表5)

次に, AD/HD-YSR 得点と攻撃性との関係を解析した。まず対象群を入院時の攻撃性尺度得点の高さをもとに分類した。M + 1.5SD 以上の高攻撃性群 (A1; n=10), M - 1.5SD 以下の低攻撃性群 (A3; n=8), その中間の中攻撃性群 (A2; n=96) とした。AD/HD-YSR 得点と攻撃性との関係を明らかにするために, 不注意得点, 多動・衝動性得点, 合計得点それぞれにおいて, 一元配置の分散分析を行った。その結果, 不注意得点が攻撃性に与える影響は有意であった [F (2, 111) = 4.66,  $p < .05$ ]。Tukey の HSD 法を用いた多重比較を実施したところ, A1 と A3 群間, A2 と A3 群間に有意差があり, A1 と A2 群間に有意差は見られなかった。すなわち, 不注意得点と攻撃性の得点の高さには一部関連性があることが示唆された。

同様に多動・衝動性得点が攻撃性に与える影響は有意であった [F (2, 111) = 5.21,  $p < .01$ ]。多重比較の結果によると, A1 と A

表5 攻撃性尺度における因子別に見た各群の平均値および分散分析の結果

不注意得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	7.4	1.6	96	6.2	2.5	8	4.0	1.5	4.66* A1>A3, A2>A3
多動・衝動性得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	5.6	2.5	96	4.2	2.3	8	2.1	1.6	5.21** A1>A3, A2>A3
AD/HD-YSR 合計得点									
A1			A2			A3			F 値
度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
10	13.0	3.8	96	10.4	4.0	8	6.1	2.5	6.96*** A1>A3, A2>A3

注1) A1=高攻撃性群, A2=中攻撃性群, A3=低攻撃性群。

注2) 有意な差が見られたもののみ記した。

注3) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 。

3群間, A2とA3群間に有意差があり, A1とA2群間に有意差は見られなかった。すなわち, 多動・衝動性得点と攻撃性得点の高さの関連性が示唆された。

さらに, 同様にAD/HD-YSR合計得点が攻撃性に与える影響は有意であった [F(2, 111) = 6.96,  $p < .001$ ]。多重比較の結果, A1とA3群間, A2とA3群間に有意差があり, A1とA2群間に有意差は見られなかった。すなわち, AD/HD-YSR合計得点の高さと攻撃性の高さには関連性があることが示唆された。

### AD/HD 特性に見る攻撃性得点 (表6)

次にAD/HD-YSR合計得点において, cutoff point以上であったAD/HD疑いあり群 (n=28) と疑いなし群 (n=86) で入・仮

退院時の攻撃性の高さを比較検討するためにt検定を実施した。入院時において, AD/HD疑いあり群の攻撃性得点 (M=84.9, SD=11.2) は, 疑いなし群 (M=76.0, SD=13.1) と比較して, 有意に高かった [t(112) = 3.21,  $p < .01$ ]。

一方, 仮退院時において, AD/HD疑いあり群の攻撃性得点 (M=86.6, SD=16.2) は, 疑いなし群 (M=80.3, SD=16.1) と比較して, 有意差は確認されなかった [t(112) = 1.91, n.s.]。したがって入院時の攻撃性はAD/HD-YSR合計得点と関連が認められたが, 逆に仮退院時の攻撃性にはそれらの関連が認められなかったことが明らかとなった。

表6 AD/HD 特特性に見る攻撃性得点

		度数	平均値	標準偏差	t 値	df
入院時攻撃性得点	AD/HD疑いあり	28	84.9	11.2	3.21**	112
	AD/HD疑いなし	86	76.0	13.1		
仮退院時攻撃性得点	AD/HD疑いあり	28	86.6	16.2	1.91 n.s	112
	AD/HD疑いなし	86	80.3	16.1		



## 4 考 察

### ❖ 対象群の特性

結果を解釈するまえに、本研究対象群の特性について認識しておく必要がある。A少年院は中規模の初等・中等少年院である（非行時14～20歳）。家庭裁判所の決定により少年院送致となった少年は、年齢や非行内容や犯罪進行度等に応じて、それぞれの少年院に送られ、矯正教育を受けつつ更生の道を歩む。少年1人ひとりの生育背景や犯罪に至る事情には、きわめて多様性・特殊性が見られる。在院生の多くは多岐多様で複雑な家庭環境におかれていた傾向がある一方で、院内には虞犯から殺人等の凶悪犯まで広く存在している。すなわち、多数例調査によって検出された共通性や特性を精査する際には、このような在院生1人ひとりがかかえる特殊性にも注視する必要がある。

### ❖ 入仮退院時の自尊感情・攻撃性の変容

大川ら（2000）は矯正協会附属中央研究所の一連の研究で、少年院生対象に入・仮退院時の自尊感情の推移を検討している。一般群と比較検討していないが、仮退院時では有意な自尊感情の高まりが見られ、矯正教育の効果が確認できたと報告している。しかしながら初入院群と再入院群、および年少者と年長者では自尊感情の変化にばらつきがあり、一定した傾向ではなかった。本研究では入・仮退院時で自尊感情に大きな差がないことが確かめられた。若干の質問紙や手続きの違いが存在したことを前提として、両結果には明確な違いが見られたといえよう。

一方松浦ら（2007a）の先行研究により、別

の少年院で同様の質問紙と手続きにより自尊感情の推移を評価したところ、本研究とほぼ共通した結果が得られた。この研究では性別と年齢をマッチングさせたコントロール群を設定しており、少年院在院者が著しく低い自尊感情を有していたことも確かめられている。さらに2つの調査の入・仮退院時の平均値も近似しており、少年院在院者の特性として実証的資料が集積されたと考えられる。

James（1892）が指摘するように、人は満足・不満足に対する客観的理由とは無関係の、ある平均的な自己感情をもっており、自尊感情とはそのようなものである。Trzesniewskiら（2003）は自尊感情とは生涯を通じて安定性をもってしていると指摘しており、その変容は難しいのかもしれない。

しかしながら松浦らは、自己肯定意識尺度を実施した結果、下位尺度“充実感”の有意な向上を示している（松浦ほか、2006）。同下位尺度“自己受容”に変化は見られなかった。すなわち自己への受容感・肯定感は変化がなかったが、少年院で取り組んだことの充実感は満たされている、と解釈できよう。このような結果は臨床的印象とも符合するものである。少年院在院者の多くが矯正教育期間中にしっかりとした学力をつけ、社会で役立つ資格を複数取得して仮退院している。したがって自尊感情の推移のみで矯正教育の効果を検証するのは乱暴であり、あくまで多数例調査において心理・医学的特性を検出している、と認識するのが妥当であろう。

一方で、仮退院時の攻撃性が高まるという結果は、松浦らの先行研究と符合していた（松浦ほか、2006）。先行研究ではコントロール群を設定しており、入院時の攻撃性はコントロール群より有意に低く、仮退院時のそれはコントロール群と差がなかった。自尊感情

の結果と同様に、攻撃性得点も先行研究結果と近似していた。一般的には少年院送致になる少年の攻撃性は高いと予想されるのだが、大川らの先行研究でも逆の結果が認められている（大川ほか、1998）。

松浦ら（2005）は少年院在院者の攻撃性の特性について、不表出性攻撃性に偏りがあることを指摘しているが、少年院送致という審判結果が心理面に影響を与えている可能性も否定できない。攻撃性の推移について、現在のところ一定した解釈を導き出すに至っておらず、今後いっそうの堅実な資料収集と分析が求められよう。

### ❖ 記述統計量および相関係数

AD/HD-YSR の不注意得点、多動・衝動性得点、合計得点と、入・仮退院時の自尊感情・攻撃性にはきわめて特徴的な傾向が確認された。不注意得点が入院時の自尊感情と負の相関があったことは、発達的問題性が自尊感情に影響を与えていた可能性がある。また、入院時の攻撃性と AD/HD-YSR の不注意、多動・衝動性および合計得点すべてに正の相関関係が認められ、仮退院時の攻撃性と正の相関関係にあったのは多動・衝動性、および合計得点であった。これらの結果より、AD/HD の発達的問題性と攻撃性には密接な関連が示され、両者の密接性は実際の行動（非行行動）にも影響を与えていたことが示唆された。AD/HD-YSR は自身の学童期（小学校3、4年生頃）を回想して記入を求めており、早期の不注意、多動・衝動性などの発達的特性と攻撃性や攻撃的行動の関連が注目される場所である。

攻撃性と非行との関連研究は豊富に存在し（Trzesniewski et al., 2006）、多くの研究報告は、非行に至る者は攻撃性が高く、攻撃的

行動を頻発させ、しかもそれが合理的手段であると認識している、と結論づけている（Nasby et al., 1980；Dodge and Somberg, 1987）。Kim-Cohen ら（2005）は大規模縦断的疫学調査の結果、4、5歳時点で青年期の行為障害を予知することは可能であるとし、その最も重要かつ決定的因子は攻撃性と反社会的行動であるとしている。注目すべきは発達障害と攻撃性との関連である。衝動性が障害の中核である AD/HD 児らにとっては、攻撃性が直接的攻撃行動につながりやすいという背景がある（Halperin et al., 1992；Atkins and Stoff, 1993）。Moffitt（1990）は Dunedin における Birth Cohort Study で、早期に多動・衝動性等の特徴を示し、攻撃性が強い男児が非行化する比率が高く、予後転帰も不良であることを実証的に示した。

このように多くの非行研究において、非行行動と攻撃性は強い親和性があり、発達的問題性（AD/HD の中核症状である、不注意、多動・衝動を含む）の有無や深刻度は青年期以降の予後に重大な影響を与えることが明らかにされている。深刻な非行化群と思われる少年院在院者を対象とした本研究結果でも、早期の発達的問題性と攻撃性に密接な関連があるという、先行研究と符合する結果が得られた。本邦では初めてのこのような資料をさらに蓄積し、解析していくことで、これらの複雑な関係が解明されていくであろう。

入院時の自尊感情と攻撃性との負の相関関係が検出されたことについても、重要な意味があると思われる。自尊感情の低さと攻撃性の高まりや攻撃行動の誘発については多くの関連研究が示していることであり、先行研究に符合するといつてよかろう。仮退院時に自尊感情と攻撃性の関連が検出されなかったのは、矯正教育を受けた少年の内的変容を表し

ている可能性もある。本研究結果だけで一定の解釈を導き出すことはできないが、退院後の生活にも関わる、重要な知見であろう。

また自尊感情および攻撃性ととも、入・仮退院時の得点には強い相関が見られた。性別や人種を越えて、自尊感情は一生を通じて安定性があるという大規模調査結果もあり (Trzesniewski et al., 2003), これらの心理的特性は持続性があるものと捉えることもできよう。ただし心理的特性に変化がなかったことと、矯正教育の評価とは厳密に区別されなくてはならない。仮退院していく少年達が行動面・社会性・情緒面で大きく成長していることは事実である。これらの認識を踏まえると、いっそう対象者の心理的特性の傾向が顕在化すると思われる。

#### ❖ AD/HD-YSR 得点が自尊感情・攻撃性に与える影響

高自尊感情群 (A1 群) は AD/HD-YSR 得点が低いということは、予想された結果と符合していた。多動・衝動性得点において有意差はなかったが、不注意得点で有意差が認められた、ということは、「同じ間違いを繰り返す」「何度言っても忘れてしまう」という行動特性がより自尊感情に影響を与えている可能性がある。不注意・不適切な言動により、周囲から叱責・非難されるケースは多いと推測され、対象群の多くの少年もこのような経験をしてきたと思われる。

AD/HD-YSR 得点が攻撃性に与える影響は、不注意得点、多動・衝動性得点、合計得点で検出された。群間比較からも明瞭に見てとれるように、AD/HD の行動特性は攻撃性に強い影響を与えていると思われる。

#### ❖ AD/HD 疑いあり群と攻撃性得点

AD/HD 疑いあり群と疑いなし群と比較したところ、入院時の攻撃性は有意に高かったが、仮退院時には差が認められなかった。入院時には AD/HD の行動特性と攻撃性には強い関連が見られるが、仮退院後にはそうではなくなったと解釈できよう。約 1 年間縦断的に調査したところこのような結果が得られた。矯正教育期間には日々の教育課程や多くのプログラムが存在し、さまざまな介入因子があるため、単純な解釈は不可能であるが、矯正教育を評価するものとして、重要な知見であると思われる。

## 5 総合考察

いくつかの横断的調査結果より、AD/HD-YSR 得点と自尊感情、攻撃性との関連が検出されたことから、発達の問題性は自尊感情や攻撃性に影響を与えていることが明らかとなった。また、数年間にまたがる縦断的調査結果より、少年院在院者の自尊感情・攻撃性の推移の特徴が明らかにされた。ここでも発達の問題は無視できない因子であることが確かめられたと同時に、松浦らの先行研究と驚くほど近似した結果が得られたことから、少年院在院者の共通する特徴が導き出されたと考えられる。

しかしながら多くの課題も残されている。本研究で使用した質問紙は、回顧式かつ自記入型のものである。本人しか知りえない情報が収集可能である一方で、ある程度のバイアスが存在していることは否めない。また、入・仮退院時の心理特性についても、多数の因子が影響していると考えるのが妥当であるため、安易に矯正教育評価につなげるべきではないだろう。

また、得られた結果はある程度われわれの

仮説と符合するものであったとあってよいが、発達の問題性や低い自尊感情、高い攻撃性などがどのように非行行動につながっていくのかはまだ明らかにされていない。今後心理的特性と問題行動発現とのメカニズム解明が重要な課題になるとと思われる。本研究のような実証的知見に基づき、さらに研究を展開する必要がある。

【謝辞】 論文の作成にあたり、貴重なご助言・ご協力をいただきました鳴門教育大学の橋本俊顕先生に感謝申し上げます。また、本研究の調査に協力いただきました少年院在院者・少年院教官の方々に心よりお礼申し上げます。

#### 文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之, 1999, 「日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討」『心理学研究』70: 384-92。
- Atkins, M.S. and D.M., Stoff, 1993, "Instrumental and Hostile Aggression in Childhood Disruptive Behavior Disorders," *Journal of Abnormal Child Psychology*, 21: 165-78.
- Baumeister, R.F., J.D. Campbell, J.I. Krueger et al., 2005, "Exploding the Self-esteem Myth," *Scientific American*, 292: 70-7.
- Biederman, J., S.V. Faraone, A. Doyle et al., 1993, "Convergence of the Child Behavior Checklist with Structured Interview-based Psychiatric Diagnoses of ADHD Children with and without Comorbidity," *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 34: 1241-51.
- Biederman, J., E. Mick, S.V. Faraone et al., 2001, "Patterns of Remission and Symptom Decline in Conduct Disorder: A Four-year Prospective Study of an ADHD Sample," *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 40: 290-8.
- Bushman, B. J. and R. F. Baumeister, 1998, "Threatened Egotism, Narcissism, Self-esteem, and Direct and Displaced Aggression: Does Self-love or Self-hate Lead to Violence?," *Journal of Personality and Social Psychology*, 75: 219-29.
- Buss, A.H. and M. Perry, 1992, "The Aggression Questionnaire," *Journal of Personality and Social Psychology*, 63: 452-9.
- Connor, D.F., G. Edwards, K.E. Fletcher et al., 2003, "Correlates of Comorbid Psychopathology in Children with ADHD," *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 42: 193-200.
- Dodge, K.A. and D.R. Somberg, 1987, "Hostile Attributional Biases among Aggressive Boys are Exacerbated under Conditions of Threats to the Self," *Child Development*, 58: 213-24.
- Donnellan, M.B., K.H. Trzesniewski, R.W. Robins et al., 2005, "Low Self-esteem is Related to Aggression, Antisocial Behavior, and Delinquency," *Psychological Science*, 16: 328-35.
- 遠藤辰雄, 1992, 「セルフ・エスティーム研究の心理——セルフ・エスティームの研究の視座」遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋編『セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求』ナカニシヤ出版, 8-25。
- Fergusson, D.M. and L.J. Horwood, 2002, "Male and Female Offending Trajectories," *Development and Psychopathology*, 14: 159-77.
- Fergusson, D.M., M.T. Lynskey and L.J. Horwood, 1997, "Attentional Difficulties in Middle Childhood and Psychosocial Outcomes in Young Adulthood," *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38: 633-44.
- Glass, C.A., D.M. Fielding, C. Evans et al., 1987, "Factors Related to Sexual Functioning in Male Patients Undergoing Hemodialysis and with Kidney Transplants," *Archives of Sexual Behavior*, 16: 189-207.
- Halperin, J.M., K. Matier, G. Bedi et al., 1992, "Specificity of Inattention, Impulsivity, and Hyperactivity to the Diagnosis of Attention-deficit Hyperactivity Disorder," *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 31: 190-6.
- Hirschi, T., 1969, *Causes of Delinquency*, Berkeley: University of California Press.
- Horney, K., 1950, *Neurosis and Human Growth: The Struggle toward Selfrealization*, New York: Norton.
- 井上祥治, 1992, 「セルフ・エスティームに関連する研究——自己概念」遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋編『セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求』ナカニシヤ出版, 48-56。
- James, W., 1892, *Psychology: Briefer Course*. (今田寛訳, 1992-1993, 『心理学』上下, 岩波書店。)
- Kim-Cohen, J., L. Arseneault, A. Caspi et al., 2005, "Validity of DSM-IV Conduct Disorder in 41/2-5-year-old Children: A Longitudinal Epidemiological Study," *American Journal of Psychiatry*, 162: 1108-17.
- Kirkpatrick, L.A., C.E. Waugh, A. Valencia et al., 2002, "The Functional Domain Specificity of Self-



- esteem and the Differential Prediction of Aggression," *Journal of Personality and Social Psychology*, 82: 756-67.
- Kristen, P. and P. Elena, 2005, "Diagnostic Accuracy of the Astructured Photographic Expressive Language Test," *Language, Speech, and Hearing Services in Schools*, 36: 103-15.
- Lee, S.S. and S.P. Hinshaw, 2004, "Severity of Adolescent Delinquency among Boys with and without Attention Deficit Hyperactivity Disorder: Predictions, from Early Antisocial Behavior and Peer Status," *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 33: 705-16.
- 松浦直己, 2006, 「エビデンスからみた非行のリスクファクターと複合的相互作用」『こころの臨床アラ・カルト』25: 255-61。
- ・橋本俊顕, 2007, 「非行化した女子の発達の・環境の逆境性と相互作用——発達スクリーニングテストと ACE 質問紙結果から」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル高度情報研究教育センター』4: 29-40。
- ・橋本俊顕・十一元三, 2007a, 「少年院における発達障害を視野に入れた矯正教育効果分析 (I) ——少年院生の心的特性と出院時の意識の変容」『LD 研究』16: 199-212。
- ・橋本俊顕・十一元三, 2007b, 「少年院における LD, AD/HD スクリーニングテストと逆境的児童期体験 (児童虐待を含む) に関する調査——発達精神病理学的視点に基づく非行の risk factor」『児童青年精神医学とその近接領域』48: 583-98。
- ・橋本俊顕・十一元三, 2007c, 「少年院在院生における認知的特性の調査」『LD 研究』16: 95-106。
- ・橋本俊顕・十一元三, 2008, 「少年院在院者と一般高校生における学学期の行動の問題に関する調査——自己記入式 AD/HD 質問紙 (AD/HD-YSR) を用いて」『児童青年精神医学とその近接領域』in press。
- ・橋本俊顕・宇野智子ほか, 2005, 「少年院における心理的特性の調査——LD・AD/HD 等の軽度発達障害の視点も含めて」『LD 研究』14: 83-92。
- ・向井義・渡辺淳ほか, 2006, 「宇治少年院における生活モデル (Conduct Model) の検証——発達障害に焦点化した矯正教育と教育効果評価研究」『LD 研究』15: 2-34。
- Moffitt, T.E., 1990, "Juvenile Delinquency and Attention Deficit Disorder: Boys' Developmental Trajectories from Age 3 to Age 15," *Child Development*, 61: 893-910.
- Nasby, W., B. Hayden and B.M. DePaulo, 1980, "Attributional Bias among Aggressive Boys to Interpret Unambiguous Social Stimuli as Displays of Hostility," *Journal of Abnormal Psychology*, 89: 459-68.
- 小栗正幸, 1999, 「LD, AD/HD と少年非行(1)——なぜ非行領域からの報告が少ないのか」日本 LD 学会第 8 会大会発表論文集, 194-7。
- 岡邊健・小林寿一, 2005, 「近年の粗暴的非行の再検討——『いきなり型』・『普通の子』をどうみるか」『犯罪社会学研究』30: 102-17。
- 大川力・湖上康幸・門本泉, 1998, 「非行少年の自己意識に関する研究 (その 1)」『矯正協会中央研究所紀要』8: 63-77。
- 大川力・長谷川宜志・田島秀紀ほか, 2000, 「在院少年の意識の変容に関する研究 (その 1)」『矯正協会中央研究所紀要』10: 49-101。
- Rogers, C.R., 1961, *On Becoming a Person: A Therapist's View of Psychotherapy*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rosenberg, M., 1965, *Society and the Adolescent Self-image*, Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M., C. Schooler and C. Schoenbach, 1989, "Self-esteem and Adolescent Problems: Modeling Reciprocal Effects," *Sociological Review*, 54: 1004-18.
- Sakata, Y. and H. Nishida, 1996, "Comparison of Two Fetal Growth Curves in Screening for High-risk Neonates," *Acta Paediatrica Japonica: Overseas Edition*, 38: 629-33.
- Squires, J., D. Bricker and L. Potter, 1997, Revision of a Parent-completed Development Screening Tool: Ages and Stages Questionnaires," *Journal of Pediatric Psychology*, 22: 313-28.
- Trzesniewski, K.H., M.B. Donnellan, T.E. Moffitt et al., 2006, "Low Self-esteem during Adolescence Predicts Poor Health, Criminal Behavior, and Limited Economic Prospects during Adulthood," *Developmental Psychology*, 42: 381-90.
- Trzesniewski, K.H., M.B. Donnellan and R.W. Robins, 2003, "Stability of Self-esteem Across the Life Span," *Journal of Personality and Social Psychology*, 84: 205-20.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 1982, 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30: 64-8。
- 山崎勝之, 2002, 「発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法」山崎勝之・島井哲志編『攻撃性の行動科学』発達・教育論, ナカニシヤ出版, 4-38。